

# 第2回中国卓球研修および黒龍江大学卓球部招聘事業

— 平成25年度卓球部海外研修報告 —

— 平成26年度黒龍江大学卓球部招聘事業報告 —

濱田 美穂\*

(受領日：2015年5月15日)

高知工科大学共通教育教室

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

\* E-mail: hamada.miho@kochi-tech.ac.jp

要約：平成25年度学生海外研修計画の一つとして、本学と関係の深い瀋陽工業大学、黒龍江大学への卓球研修の機会を再び得ることができた。この研修は平成23年度に第1回目を行っており、今回で2度目になる。10泊11日という長い期間（前回より5泊増）、上記2大学および黒龍江プロ卓球隊との密度の濃い練習や体力トレーニングを体験することができた。プロチームには、中学生の有望選手も選抜されており、彼等から大きな刺激を受けた。練習主体の研修であったが、両大学の心からの歓迎に接し、訪問者を歓待するおもてなしの心も学ぶことができた。また、26年度には、黒龍江大学卓球部（監督2名、選手4名）を本学に招聘し、合同の合宿訓練を行なう計画が実現した（9月6日～9月12日）。これまで2回の中国研修に参加できなかった学生たちにも交流の場が与えられ、全部員が貴重な体験を得た。この交流を今後に生かし、これまで以上に精進していきたい。

## 1. 事業全体

このたび、平成23年度に続き、本学と交流の深い瀋陽工業大学、黒龍江大学への2度目の卓球研修の機会をいただいた。前回の遠征時は1年生が主体であり、試合結果は3大学（瀋陽工業大学・黒龍江大学・ハルビン工業大学）に対して惨敗に近い成績であった。今回は、当時の学生たちも早や4年生を迎えようとしており、この2年半の成長ぶりを知ること、本研修の大きな目的の1つであった。

11日間という長丁場であったが、16名中6名（男子3名、女子3名）は2度目の研修であり、おかげで全員が体調を崩すこともなく、前回のような苦い経験（下痢や発熱）をすることはなかった。その結果、みな元気で研修を終えることができ、とても有意義な研修となった。

期間中のスケジュールは、練習、練習の厳しい内容であったが、学生たちは、最後までチームワーク良く、黙々と練習に取り組んでくれた。

瀋陽工業大学（SUT）では、前回同様、李栄徳学長が、ご多忙の中、最終日まで毎日のように体育館に足を運んでくださり、最後に行われた交流戦も終日観戦して下さった。そのお心づかいにはいたく感動した。試合結果は3対4で本学の敗戦という形ではあったが、前回の遠征よりはるかに質の高い戦いできたと思っている。

黒龍江大学との研修は、本学、李朝陽先生のご尽力で、黒龍江省卓球隊（プロチーム）の選手と毎日練習をすることができた。これは学生たちにとって、日頃味わうことのできない体験で、とても良い刺激になった。

中国ではナショナルチームに入る条件として、まず省の卓球隊（プロチーム）に選抜されなければならない。だから、若い選手たちは、プロチームの一員になることを目指し必死で頑張る。プロチームでは、全員が寮生活を送っており、小学低学年から英才教育が行なわれている。

黒龍江大学卓球部の上位選手も、毎日このプロ

チームに混じって練習を行なう協定が大学と省との間で結ばれている。授業のないときや、授業を免除されているときはこの省の練習場で合同練習を行っていた。

当然、省の練習はかなりハードでレベルも高い。チームには、かつて世界で戦った著名な選手が監督やコーチとして招聘されており、この人たちは朝、昼、晩とチームと行動を共にしている。日本では考えられない恵まれた環境である。

また、国家として省に専属の指導者を置くこの政策は、卓球だけに限ったことではない。体操やバドミントン、水泳なども同じシステムで運営されており、どの競技も英才教育がなされている。強くなるのが当然である。

日本では最近、卓球の指導を職業とし、卓球塾などを経営する指導者も増えてきた。しかし、中学や高校では、ほとんどの場合、授業・校務分掌・部活動の掛け持ちで、教師は日々校務に忙殺されており、選手強化に費やす時間には限りがある。これは大学でも同様である。

黒龍江での7日間は、午前9時から午後5時まで、連日のようにプロチームと練習ができた。このことは貴重な経験となり、本学選手のレベルも短期間でかなり向上した。黒龍江大学の選手たちは省の練習に朝から参加する日もあれば、授業や試験を受けるため、大学に戻る日もある。大学のスケジュールに合わせて臨機応変に練習に参加するシステムである。実際、私たちが滞在している期間にも、授業や資格試験を受けるため、ときどき練習を抜けていた。ここでの練習時間は、通常、9～12時、14時～17時。夜間は19時～21時までである。本学も、夜間の練習に参加したいと申し出てみたが、当初の計画に入っていなかったため、それは実現しなかった。

プロチームの構成はA、B二つのチームに分かれており、Bチームは年齢の低い中学生以下で構成されている。Bチームも見学させていただきたいと考えたが、Aチームから車で40分ほど離れたところに練習場があるということで見学は断念した。

A、B両チームには入れ替え戦があり、Bチームの中から試合結果の良い選手が、Aチームに昇格するのだという。また反対に、Aチームに所属していても、成績が悪ければ、Bチームに降格し、小・中学生たちの練習相手になることがあると聞いた。やはり、プロは厳しい。実際Aチームには5～6名の小学生が在籍しており、その選手たちのレベルはかなり高い。この小学生たちが日本に留学すれば、

全国中学校卓球大会での優勝は確実であろう。

また、ここでは、技術はもとより、筋力トレーニングの方法も学ぶことができた。小学生男子が40キロのバーベルをいとも簡単に持ち上げており、その筋力の鍛え方に驚いた。本学3年生の男子が真似をして試みたが、なかなか簡単に持ち上げることはできず、危険を感じたので途中で中止した。中国では低学年からでもウエイトトレーニングを取り入れていることを知り、良い勉強となった。本学学生は同年代の中国選手と比べると、筋力がかなり劣っていると痛感した。

日本の卓球界において、筋力トレーニングの研究は中国やヨーロッパに比べ、やや遅れている感がある。彼らと日本代表選手を比較した場合、体形も少し軟弱な印象を受ける。今後、トレーニングについての研究や実践の必要性が重要であると感じた。

また、プロチームの中には、一般の高校生たちの参加も見られた。その選手たちは、授業料を払って自宅から通いながら省の練習に参加していた。授業料を聞いてみたが、親御さんが払っているのでわからないとのことであった(かなり高いとのこと)。プロチームには日本の卓球塾のような要素も含まれていることを今回の研修で初めて知った。1971年訪中時の中国ナショナルチームでは考えられない仕組みであり、中国卓球界の変化に非常に驚かされた。

上記の中国訪問に加え、26年度の9月には黒龍江大学の要望により、本学への招聘事業が実現した。これは、本学にとってはまたとない幸運で、遠征に参加できなかった学生にも大きな刺激となった。この経験を生かし、今後さらに精進したいと考える。

## 2. 研修

### 2.1 研修の概要

#### 1. 目的

- (1) 新たな卓球の技術・戦術を習得し、今後の活躍につなげる
- (2) 隣国中国の歴史と文化を学び、国際的見識を深める
- (3) 中国の成長の勢いを実感することで、帰国後の学習に対するモチベーションを高める
- (4) 英語によるコミュニケーション力の向上
- (5) 卓球交流を通じ、大学間交流の活性化に貢献する

2. 研修内容  
瀋陽工業大学… 交流試合  
黒龍江大学および黒龍江省卓球隊（省のプロチーム）との合同練習と試合
3. 研修地  
瀋陽工業大学体育館  
黒龍江大学体育館  
黒龍江省体育館（黒龍江省プロチーム）
4. 研修期間  
2014年3月1日～5日（瀋陽）  
6日～11日  
（黒龍江大学、黒龍江省卓球隊）

5. 参加学生 本学卓球部 下記16名
- |    |          |       |
|----|----------|-------|
| 男子 | マネジメント3年 | 古川 佳弘 |
|    | マネジメント3年 | 武岡 紀幸 |
|    | マネジメント3年 | 和田 直樹 |
|    | システム工学3年 | 兼子 瞭介 |
|    | マネジメント2年 | 宮本 卓也 |
|    | マネジメント2年 | 谷本 優太 |
|    | 環境理工 2年  | 森 大樹  |
|    | マネジメント1年 | 成田 湧介 |
| 女子 | マネジメント3年 | 溝渕 真由 |
|    | マネジメント3年 | 原 佳菜絵 |
|    | マネジメント3年 | 重本 愛美 |
|    | マネジメント2年 | 泉 由里奈 |
|    | マネジメント2年 | 福島 舞子 |
|    | マネジメント2年 | 岡田 夏季 |
|    | マネジメント1年 | 澤本あずみ |
|    | マネジメント1年 | 濱崎 羅奈 |

6. 引率教職員  
王 碩玉（システム工学群）  
李 朝陽（ナノテクノロジー研究所）  
山崎真理（国際交流部 職員）  
濱田美穂（共通教育卓球部顧問）

7. 事前研修  
研修に先立ち、出発前に事前研修会を3回行った。下記はその詳細である。

第1回目

- 日時 1月29日（水）  
時間 18:10～19:30  
場所 A102  
内容 誓約書の提出  
緊急連絡先届け  
パスポートコピーの提出  
次回研修についての課題（グループ発表）

第2回目

- 日時 2月20日（木）  
時間 18:10～20:00  
場所 A102  
内容 前回研修補足（国際交流部山崎真理）  
研修心構え（李朝陽先生）  
簡単中国語（李朝陽先生）  
学生発表（1グループ10分×4）  
海外旅行保険について  
スケジュール説明  
質疑応答

第3回目

- 日時 2月24日（月）  
時間 14:00～14:50  
場所 本館2階第4会議室  
内容 前回研修補足（国際交流部山崎真理）  
航空券配布  
日程等確認

上記3回の研修は国際交流部・山崎真理さんを中心とし、国際交流センター長の八田先生、同行する王先生、李先生、濱田も参加した。

学生は男女とも、4人1組となり、訪問先の遼寧省、瀋陽工業大学、黒龍江省、黒龍江大学等について調べグループ発表を行うという課題が出された。

発表内容はそれぞれの歴史や文化、食、大学の特色、中国語等についてであった。また、簡単な挨拶や自分の名前はせめて中国語で自己紹介できるように発声練習も積んだ。一昨年同様、李先生のご丁寧な指導のおかげで、中国語での挨拶も何とか形になっていった。交流会で披露する余興を男子は徳島県出身者が多いということで前回同様「阿波踊り」に、女子はKiroroの「未来へ」という曲に決めた。日本のこの曲が中国で好まれているという情報を得たからである。

この時期の瀋陽、ハルピンは気温がマイナス15°Cの日も珍しくないといわれており風邪をひかないように、マスクや、ホットカイロ、マフラーなどの準備にも配慮した。おりしも中国は、鳥インフルエンザが猛威をふるっていた時期でもあり、できるだけ出歩かず、体育館での練習を主体にすることも周知徹底した。

2.2 SUTでの研修

2度目の訪問となるSUTに出発したのは3月1日（土）の早朝。当日の出発時間は7時55分。集合は高知空港1Fロビーに6時50分とした。6時40分

には全員がそろい、機は高知空港を予定通りに離陸した。関空出発 13 時 10 分。中国南方航空で一路瀋陽に向かった。一昨年の遠征では、北京を経由しての瀋陽入りであったため到着は 20 時をまわっていたが、今回は直行便での移動で大幅に時間も短縮され、選手のコンディションは上々であった。

瀋陽到着 15 時 30 分。空港には、前回同様、国際交流部所長の姜国慶教授、交流部の李瀛先生が出迎えに来てくださっていた。お二人にはこれまでに何度かお目にかかっているが、誠実なお人柄はいつも変わることがない。

空港を出ると、道路の端には雪も残っており、歩道も凍てついてとても歩きにくい。とにかく怪我をしないよう皆に注意を与え、ゆっくりと歩いた。宿舎である瀋陽三隆春天酒店（ホテル）に到着したのは 16 時 30 分。この日は SUT 主催で姜先生、李先生を囲んでの夕食会が開かれた。

練習は翌 2 日から始まったが、今回の研修では SUT がまだ休暇に入っておらず、授業と重なっていたこともあり、合同での練習時間に限りがあり、とても残念であった。しかし、いろいろな工夫をしてくださり、練習場の確保や、学生の参加についてご配慮いただいた。

2 日目の午前中は本学だけで練習を行なった。移動の疲れも見せず、学生たちは集中し、足も良く動いて密度の濃い練習ができた。午後からは市内観光が予定され、関東影視城を見学。

3 月 3 日には一昨年同様交流戦が行なわれた。前回の交流試合ではスコアこそ 4 対 3 であったが実力には大差があった。この 1 年半の日々の練習で、選手たちの技術がどのくらい向上しているのかを見極めるのも今回の研修目的の 1 つであった。

李学長は過密スケジュールのため試合観戦はできないとおっしゃっていたが、結局毎日のように見学され、交流戦にも最初から出席くださった。感謝以外の言葉が思いつかない。

交流戦は盛り上がった雰囲気の中で下記の形式で進められた。

- 1 番 女子シングルス
- 2 番 男子ダブルス
- 3 番 男子シングルス
- 4 番 混合ダブルス
- 5 番 女子シングルス
- 6 番 女子ダブルス
- 7 番 男子シングルス

本学選手の足はよく、1 番の福島舞子選手が勝ち、幸先よく 1 点を先取した。2 番以降も試合内容

表 1  
乒乓球比赛团体记分单  
卓球の試合の団体スコアシート

| 次<br>序<br>順       | 瀋陽工業大學<br>運動員<br>選手 | 高知工科大学<br>運動員<br>選手 | 毎局比分<br>毎回スコア |         |          |         |          | 毎局<br>結果 |
|-------------------|---------------------|---------------------|---------------|---------|----------|---------|----------|----------|
|                   |                     |                     | 1             | 2       | 3        | 4       | 5        |          |
| 1、女子单打<br>女子シングルス | 魚 豔                 | 福島 舞子               | 5<br>11       | 9<br>11 | 11<br>6  | 7<br>11 |          | 1 : 3    |
| 2、男子单打<br>男子ダブルス  | 單 猛<br>李 享然         | 谷本 優太<br>成田 浩介      | 8<br>11       | 6<br>11 | 11<br>9  | 11<br>4 | 11<br>6  | 3 : 2    |
| 3、女子单打<br>女子シングルス | 李 享然                | 宮本 卓也               | 11<br>4       | 11<br>5 | 11<br>5  |         |          | 3 : 0    |
| 4、混合双打<br>混合ダブルス  | 李 昊澤<br>陳 欣         | 宮本 卓也<br>福島 舞子      | 10<br>12      | 8<br>11 | 11<br>6  | 11<br>7 | 12<br>15 | 2 : 3    |
| 5、男子单打<br>男子シングルス | 黄 豆                 | 原 佳菜絵               | 11<br>6       | 11<br>4 | 5<br>11  | 11<br>7 |          | 3 : 1    |
| 6、女子双打<br>女子ダブルス  | 張曉簡<br>陳 欣          | 重本 愛美<br>原 佳菜絵      | 11<br>6       | 11<br>9 | 10<br>11 |         |          | 3 : 0    |
| 7、男子单打<br>男子シングルス | 晁 凡                 | 谷本 優太               | 11<br>5       | 6<br>11 | 4<br>11  | 11<br>9 | 8<br>11  | 2 : 3    |

比賽結果( 試合の結果 ) : 4 : 3

表 2. 3 月 4 日 SUT との交流試合結果 (15 試合)  
女子

|       | 陳欣  | 黄豆  | 鮮豔  | 張曉簡 |
|-------|-----|-----|-----|-----|
| 泉有里奈  | 0-3 | 2-3 |     |     |
| 重本愛美  |     | 2-3 | 0-3 |     |
| 原佳菜絵  |     |     | 1-3 | 2-3 |
| 溝渕真由  | 0-3 |     | 1-3 |     |
| 澤本あずみ |     |     | 2-3 | 1-3 |
| 濱羅奈   | 0-3 | 0-3 |     |     |
| 岡田夏季  |     |     |     | 1-3 |
| 福島舞子  | 3-2 |     |     | 1-3 |

は前回よりはるかに良かったが、残念なことに結果は前回同様 3 対 4 で敗れてしまった (表 1)。4 番の混合ダブルスが勝敗の分かれ目で、フルセットの末 5 セット目 13 対 15 で敗れたのは大きな痛手であった。しかし、ラストで谷本優太選手が善戦し勝ち星を挙げたのは大殊勲である。

また、この日の午後は、SUT の選手の方と個人戦だけの試合も行うことになり、男子は一人 3 試合、女子は一人 2 試合を目標として試合に臨んだ。結果は、男子 22 試合 (表 3)、女子 15 試合 (表 2) と全員がほぼ目標を達成した。団体戦に出場できなかった選手にとっては、非常に価値のある体験となった。

最終日にはトレーニングが計画され、SUT でよく実施するオリエンテーリング形式のトレーニングが実施されるはずであった。みな楽しみにして

表 3.3月4日 SUT との交流試合結果 (22 試合) 男子

|      | 李昊澤 | 陳驥馳 | 楊光  | 邢志奇 | 肖磊  | 李孚然 | 晁夙  |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 吉川佳弘 | 1-3 | 3-0 | 2-3 | 3-0 |     |     |     |
| 兼子瞭介 | 1-3 |     | 3-0 |     | 3-0 | 0-3 |     |
| 武岡紀幸 |     | 3-1 | 3-0 | 3-0 |     |     |     |
| 和田直樹 | 1-3 |     |     | 3-0 |     | 0-3 |     |
| 宮本卓也 | 0-3 |     |     |     |     | 0-3 |     |
| 谷本優太 | 2-3 |     |     | 3-0 |     |     |     |
| 森 大樹 | 1-3 | 3-0 |     |     |     |     |     |
| 成田湧介 |     |     |     |     |     | 1-3 | 0-3 |

いたが、この日は朝から雪になり、戸外で行うこのトレーニングは広大な大学の敷地に不慣れな本学の選手には危険であると判断し、残念ながら中止とした。

今回の訪問では、授業のため合同での練習が少なかったこと。また、悪天候のため、当初の計画を変更せざるを得なかったことも心残りの出来事となった。SUT 監督の林先生はこのオリエンテーリングのため 20 枚のトレーニングの指示カードを作成して下さっていたが、それを生かすことはできなかった。せめてもと言うことでお土産にそのカードをいただいて帰国した。役に立てたいと考えている。

### 2.3 黒龍江省卓球隊での研修

ハルピンに到着したのは 3 月 5 日、16 時過ぎ。瀋陽、ハルピン間は新幹線での移動であった。筆者は 1971 年から、これまでに 10 数回の訪中経験があり、列車での移動を幾度か経験しているが、新幹線を利用したのは初めてであった。

瀋陽駅のロビーは想像をはるかに上回る乗客でごった返しており、中国の繁栄振りが一目瞭然である。水曜日だと言うのに子供連れや旅行客で待合室は満席状態である。少し不安もあったが、発車もとてもスムーズで日本の新幹線と座席の並び以外は何の変わりもない。約 3 時間あまりの列車の旅は快適とさえ感じた。ハルピン駅には黒龍江大学の職員の方が出迎えに来てくれ、一路、大学の学生寮に向かった。6 日間の合宿訓練がこの日から始まった。前述したように、黒龍江ではプロチームと練習させていただく計画になっており、みな、不安と期待の入り混じった複雑な心境であった。

中国プロチームと切磋琢磨できることは日本ではなかなか難しく、またとないチャンスである。また、今回の研修では第一の目標を「練習量の確保」

表 4. 男子団体リーグ  
男子 比 賽

| A 組 | 理工  | 高知研 | 黒大  | 工大  | 勝場数 | 勝負積分比率 | 積分 | 名次 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--------|----|----|
| 理工  |     | 4:1 | 1:4 | 4:1 | 2   |        | 5  | 2  |
| 高知研 | 1:4 |     | 1:4 | 1:4 | 0   |        | 3  | 4  |
| 黒大  | 4:1 | 4:1 |     | 4:1 | 3   |        | 6  | 1  |
| 工大  | 1:4 | 4:1 | 1:4 |     | 1   |        | 4  | 3  |

においていたため、期間中のほとんどの時間を練習に費やした。朝 9 時から午後 5 時まで、慣れない地で強豪相手に練習を積むのは、学生には少し過酷であったかも知れない。しかし、このような好環境は高知県に居たのではほとんど不可能に近い。せっかく頂いた大きなチャンスだけに時間を惜しんでやりたい気持ちが強かった。選手たちもきついスケジュールであったが、よくがんばってくれた。3 月 8 日には男子はプロチームとシングルの試合を 35 試合もおこなうことができた (表 5)。

また、最終日には黒龍江大学女子卓球部監督の李大志先生の計らいで、近隣のハルピン理工工業大学・ハルピン工業大学 (男女卓球部) に参加要請をしてくださり、本学を含めた 4 大学で大会が開催された。試合形式は 4 シングルス 1 ダブルスの 4 単 1 複方式で、男女とも参加大学との総当たりリーグ戦を行なう大会であった (表 4, 6)。

この日は平日 (月曜日) にもかかわらず、近隣の方や、大学関係者も観戦に訪れてくれ、会場は大きな声援で賑わった。大会は予想以上の盛り上がりを見せた。さすがに卓球が国技の中国である。李朝陽先生のご両親も特にお母様はご病気だと言うのに無理をされ観戦に来てくださった。

この研修を通じ、学生たちの進歩は著しく、最終日に行なわれた交流試合で女子は予想以上に健闘

表 5.3月8日 黒龍江省卓球隊との交流試合結果 (35 試合) 男子

|      | 單孚猛 | 刘子涵 | 瓮程  | 張蕾  | 張輝  | 白浩然 | 案双志 | 李牧野 | 籽捱分 | 徐拔文 |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 吉川佳弘 |     |     |     |     |     | 0-3 | 2-3 | 1-3 | 0-3 | 0-3 |
| 兼子瞭介 |     |     |     |     |     | 3-2 | 0-3 | 2-3 |     | 0-3 |
| 武岡紀幸 |     | 2-3 | 0-3 | 0-3 | 0-3 |     |     |     |     |     |
| 和田直樹 |     |     |     |     |     | 0-3 | 3-2 | 1-3 |     |     |
| 宮本卓也 | 1-3 | 1-3 | 0-3 | 1-3 | 3-2 |     |     |     |     |     |
| 谷本優太 | 1-3 | 2-3 | 2-3 | 0-3 | 0-3 |     |     |     |     |     |
| 森 大樹 |     |     |     |     |     | 2-3 | 3-0 | 1-3 |     | 0-3 |
| 成田湧介 | 0-3 | 0-3 | 0-3 | 0-3 | 2-3 |     |     |     |     |     |

表 6. 女子団体リーグ  
女子比賽

| A 組 | 理工       | 工大       | 黒大       | 高知大      | 勝場数 | 勝負積分<br>比率 | 積分 | 名次 |
|-----|----------|----------|----------|----------|-----|------------|----|----|
| 理工  |          | 0:5<br>1 | 0:5<br>1 | 0:5<br>1 | 0   |            | 3  | 4  |
| 工大  | 5:0<br>2 |          | 2:3<br>1 | 2:3<br>1 | 1   |            | 4  | 3  |
| 黒大  | 5:0<br>2 | 3:2<br>2 |          | 2:3<br>1 | 2   |            | 5  | 2  |
| 高知大 | 5:0<br>2 | 3:2<br>2 | 3:2<br>2 |          | 3   |            | 6  | 1  |

し、対戦した3大学にすべて勝つことができた。強豪の黒龍江大学にも4対3の激戦の上、勝利することができた(表6)。これはこの遠征の最大の収穫であり、勝った瞬間には跳びあがりたほど気持ちが高揚した。男子は健闘むなしく3敗し4位という結果であったが、どの試合も次につながる良い内容であった。黒龍江での多くの貴重な経験を今後に生かし、帰国してからの大学生活全般に反映させたい。表5,4,6は黒龍江で行なった試合結果である。

### 3. 招聘

#### 3.1 黒龍江大学と合同練習

平成26年度国際交流センター事業として、26年3月に本学卓球部がたいへんお世話になった黒龍江大学卓球部の招聘が実現した。これは本学李朝陽先生はじめ関係のかたがたのご尽力によるものである。研修期間は9月6日より12日までの7日間(実質練習は5日間)であった。この事業の実現は、3月の中国研修に参加できなかった学生たちにとっては非常にありがたい合同練習であった。

黒龍江大学のメンバーは引率教員2名、男子選手2名、女子選手2名の合計6名で、女子の鄒阻選手は中国代表として数々の海外遠征に参加している中国代表のプレイヤーである。われわれの訪問時には鄒選手は国際試合に参加中で不在であった。今

日もロシア遠征を終えたばかりの来学で、少し疲れているとの情報であった。

研修の概要は下記のとおりである。

#### 1. 引率教員

郭 金丰 (黒龍江大学体育教育研究部主任)

李 大志 (体育教育研究部副教授)

#### 2. 男子選手

元振

王 千一

#### 3. 女子選手

呂 彤

鄒 阻

#### 4. 宿泊施設

本学国際交流会館

#### 5. 研修日程と内容

9月6日(土)

18:40 高知龍馬空港着

19:30 大学着

19:30 学生夕食(学食)

20:00 歓迎夕食会

(郭主任・李副教授・先川教授・李朝陽教授・国際交流部山崎・瀧田の計6名)

9月7日(日)

9:30~11:30 基本練習

12:00~13:30 昼食(弁当)

14:00~16:30 交流試合

17:30~19:30 歓迎会(本学ラウンジ)

9月8日(月)

9:30~11:30 交流試合

12:00~13:30 昼食

(学長を囲んで本学ラウンジで)

14:30~16:30 応用練習

16:30~19:30 夕食  
(学生は学生食堂にて)

19:00~21:00 歓迎会  
(郭主任・李副教授・八田教授・李朝陽教授・国際交流部山崎・瀧田の計6名)

9月9日(火)

9:30~11:30 基本練習  
12:00~13:30 昼食(弁当)  
14:00~17:00 応用練習  
18:00~19:30 夕食  
(学生は学生食堂にて)

9月10日(水)

9:30~11:30 基本練習  
12:00~13:30 昼食(学食)  
14:00~17:00 応用練習  
18:00~19:30 夕食  
(学生は学生食堂にて)

9月11日(木)

9:30~11:30 基本練習  
12:00~13:30 昼食(学食)  
14:00~16:30 応用練習  
17:30~19:30 お別れ会  
(国際交流会館にて。両大学選手監督・八田教授・先川教授・李朝陽教授・国際交流部部長福留・国際交流部山崎・瀧田の計30名参加)

9月12日(金)

8:00~15:30 市内観光  
(竹林寺、高知城、ひろめ市場、桂浜)

16:25~ 高知空港出発

9月13日(土)

11:05~ 関空出発 → ハルピンへ

### 3.2 招聘事業を終えて

平成25年度の訪中に続き、この招聘事業(合同練習)を実施できたことは筆者にとっても学生たちにとっても非常に有意義な経験となった。日ごろの練習でもっとも重要なことは、「練習相手に恵まれること」だと、常々考えている。指導者の重要な役割の一つとして、この環境作りが挙げられるとさえ思う。

卓球部の部員は、現在男女で48名であるが、実

表7.9月8日黒龍江大学対高知工科大学交流戦

| 黒龍江大学対高知工科大学団体戦 2014年9月8日 |      |         |                           |              |
|---------------------------|------|---------|---------------------------|--------------|
| 順番                        | 種目   | 氏名      | 得点                        | 氏名           |
| 1番                        | 男子单打 | 李振魯     | 11 0<br>2 11<br>11 5      | 福田知治         |
| 2番                        | 女子单打 | 鄒陽      | 11 0<br>11 5<br>7         | 福島舞子         |
| 3番                        | 男子双打 | 李振魯/王千一 | 11 0<br>12 10             | 宮本卓也<br>成田善介 |
| 4番                        | 女子双打 | 鄒陽/品彤   | 6 11<br>11 5<br>3         | 松山明花<br>福島舞子 |
| 5番                        | 男女双打 | 李振魯/品彤  | 11 0<br>11 11<br>11       | 宮本卓也<br>福島舞子 |
| 6番                        | 男子单打 | 王千一     | 8 11<br>11 11<br>4 5      | 宮本卓也         |
| 7番                        | 女子单打 | 品彤      | 9 0<br>9 8<br>11 11<br>11 | 原佳菜絵         |
| 監督サイン                     |      | 李兆一     | 監督サイン                     | 成田美穂         |

力は部員により様々で、毎日自分より強い相手と練習することはなかなかむづかしい。同じ相手との練習ばかりでは球質にも慣れ、つつい緊張感の欠けた練習になりがちで、マンネリ化してしまうことも多い。

今回来学した、黒龍江大学の選手たちは部内選考を経て来日した選手であり、4人とも実力の高い選手であった。なかでも鄒阻選手については前述したとおりである。当然、期間中の練習は緊張したものとなり、本学学生は日に日にボールの威力や球質の変化に対応できるようになった。

3日目に行なわれた交流戦には佐久間学長はじめ学生支援センター長の渡邊先生、ほか数名の先生方も観戦に来られ、新入生を含む学生たちは全力で戦った。結果は3対4の敗戦であったが、かなりレベルの高い内容の試合ができたと考えている(表7)。

9月初旬の残暑もかなり厳しい本学体育館において、高知到着の翌日から長時間の練習に参加していただき、感謝の気持ちでいっぱいである。また、女子監督の李大志先生には中国練習の基本を書いた冊子をお土産に頂いた。来学のほとんどの時間を練習に費やしていただき、申し訳ない気持ちもあるが、卓球部にとっては、非常に得ることの多い5日間であった。

表 8.9月7日 黒龍江大学との交流試合（16 試合）男子

|      | 王千一 | 元振魯 | 呂彤  | 鄒阻  |
|------|-----|-----|-----|-----|
| 宮本卓也 | 3-0 | 3-2 | 3-2 |     |
| 成田湧介 | 1-3 |     |     | 0-3 |
| 村田侃生 | 0-3 | 1-3 |     |     |
| 福田知治 | 0-3 |     |     | 2-3 |
| 児玉飛鳥 | 3-1 |     |     | 0-3 |
| 坂本晃一 | 0-3 | 0-3 |     |     |
| 梶本貴尚 | 3-0 |     | 0-3 |     |
| 大下全士 |     | 0-3 |     |     |

表 9.9月7日 黒龍江大学との交流試合（9 試合）女子

|       | 呂彤  | 鄒阻  |
|-------|-----|-----|
| 原佳菜絵  | 0-3 |     |
| 溝渕真由  | 0-3 |     |
| 松山明花  |     | 3-2 |
| 重本愛美  |     | 1-3 |
| 福島舞子  | 3-1 | 0-3 |
| 藤田    |     | 1-3 |
| 高原 彩  | 2-3 |     |
| 高原 舞  |     |     |
| 堀田真奈美 | 1-3 |     |

この経験を今後の大会に生かし、何らかの成果に代えて黒龍江大学に報告したいと考えている。二度にわたる中国訪問の上に、さらにこの招聘事業を実現していただき、関係して下さった皆様には本当にお礼の気持ちでいっぱいである。

表 7, 8, 9, 10, 11 はこの 5 日間の試合結果である。

#### 4. 学生の感想

##### 3 / 1 瀋陽工業大学第 1 日目

マネジメント学部 3 年 1150467 古川 佳弘

研修 1 日目は、15 時 30 分頃に瀋陽空港に到着。そこには、前回の中国卓球交流でも大変お世話になった瀋陽工業大学の姜先生と李先生が出迎えてくださった。その後、瀋陽三隆春天酒店（写真 1）というホテルに移動し、16 時 30 分まで各自休憩し、17 時 30 分からは瀋陽工業大学主催の歓迎会がホテル近くのレストランで行なわれるため、そこまでバスで移動した。そして、18 時から KUT の学生、教員、李先生、姜先生、SUT の学生たち、また、KUT の卒業生の方 2 人も参加され、みんなで夕食を楽し

表 10.9月10日 黒龍江大学との交流試合（7 試合）男子

|      | 王千一 | 元振魯 | 呂彤  | 鄒阻  |
|------|-----|-----|-----|-----|
| 宮本卓也 | 1-3 |     |     | 0-3 |
| 成田湧介 | 2-3 |     |     |     |
| 村田侃生 |     |     |     |     |
| 福田知治 |     | 2-3 | 0-3 |     |
| 児玉飛鳥 | 2-3 |     |     |     |
| 熊本健宏 |     | 1-3 |     |     |

表 11.9月10日 黒龍江大学との交流試合（8 試合）女子

|      | 呂彤  | 鄒阻  | 王千一 | 元振魯 |
|------|-----|-----|-----|-----|
| 原佳菜絵 | 3-0 | 3-0 |     | 3-0 |
| 松山明花 | 3-1 |     |     |     |
| 重本愛美 |     | 2-3 |     |     |
| 福島舞子 | 2-3 | 0-3 | 1-3 |     |

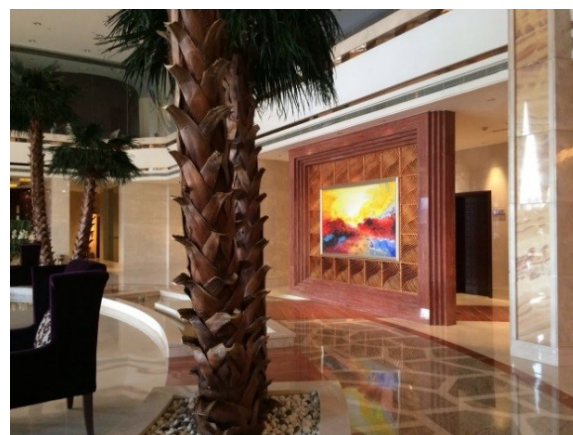


写真 1. 瀋陽三隆春天酒店のロビー

んだ（写真 2）。夕食では、豪華な中華料理が多く並べられ堪能することができた。また、工科大 OB の方の話す日本語がとても流暢なことに驚いた。工科大生時代の懐かしいお話や卓球についてのお話ができ大変楽しかった。

<研修を終えて>

今回で 2 度目となる中国卓球研修であった。前回訪れたのが夏だったこともあり、今回、瀋陽空港に到着すると大変寒く感じた。また、周囲の景観の変化にも驚かされた。前回は、瀋陽のバスからの景色は、きれいとは言いがたかったが、今回は道路や建物が新しくなり、整備されているように感じた。周りを見ても建設中の建物が





写真2. 夕食を楽しむ KUT・SUT の教員と学生



写真3. 瀋陽工業大学の体育館

多く、高層ビルがどんどん増えている印象が大きく、中国は日本と比べてすべての事柄に勢いがあるように感じた。

### 3 / 2 午前 卓球練習

マネジメント学部 3年 1150425 重本 愛美

研修2日目は朝10時から11時半頃までKUTの学生のみで練習を行った。体育館への移動中、研修最初の練習ということで皆とても緊張した表情でやる気に満ち溢れていた。各自、音楽を聞いて気持ちをリラックスさせたり、会話をしたりと全体の雰囲気はよかったと思う。

練習内容は男女に分かれて、それぞれ課題を決めて練習に取り組んだ。あらかじめ各自持ち時間を決めておき、初めは全員シングルの練習をし、途中でダブルスの練習をした。また、練習相手をかえて課題をこなしたりもした。中国は空気がとても乾燥しており、サーブがいつものように出せなかったり、ボールがとばなかったりと戸惑った点も多かったが、自分たちで考え修正することができた。練習時間が短い分、全員で声を出して盛り上げ、良い雰囲気での練習をすることができた。

<研修を終えて>

2度目の中国遠征ということもあり、SUTの体育館を見たとき、とても懐かしく感じた。体育館の中の雰囲気は2年前と変わらず、その広さと観客席の多さに改めて圧倒された(写真3, 4)。しかし同時に、ますます「ここでやってやるぞ」と気が引き締まる思いがした。環境の違いから、サーブが思うように出せなかったり、ボールが飛ばなかったりと、戸惑ったことはたくさんあったが、それを修正することも大切な練習であることを学んだ。また、限られた時間の中で集中力を欠かさず声を出し、自分を盛り上げて練習に臨むと時間の経つのが早く感じられた。海外遠征経験の豊富な一流選手が、どのような国でも力を発揮できるのは日頃の訓練の賜物だと知ることができた。私たちもどんな苦しい場面でも自分が持っている全ての力を出せるように、いつも緊張した状態で練習しなければならないことを痛感した。また、中国の様々な事柄について、もっともっと勉強したいと強く思った。この経験を後輩たちに伝えていきたい。



写真4. 「ようこそ！ 高知工科大学卓球チーム 代表団」と書かれた電光掲示板

んあったが、それを修正することも大切な練習であることを学んだ。また、限られた時間の中で集中力を欠かさず声を出し、自分を盛り上げて練習に臨むと時間の経つのが早く感じられた。海外遠征経験の豊富な一流選手が、どのような国でも力を発揮できるのは日頃の訓練の賜物だと知ることができた。私たちもどんな苦しい場面でも自分が持っている全ての力を出せるように、いつも緊張した状態で練習しなければならないことを痛感した。また、中国の様々な事柄について、もっともっと勉強したいと強く思った。この経験を後輩たちに伝えていきたい。

### 3 / 2 午後 市内観光、歓迎会

マネジメント学部 3年 1150456 原 佳菜絵

遠征2日目の午後は、KUT学生のみで瀋陽市内を観光した。SUTを12時40分に出発し、大学のバ

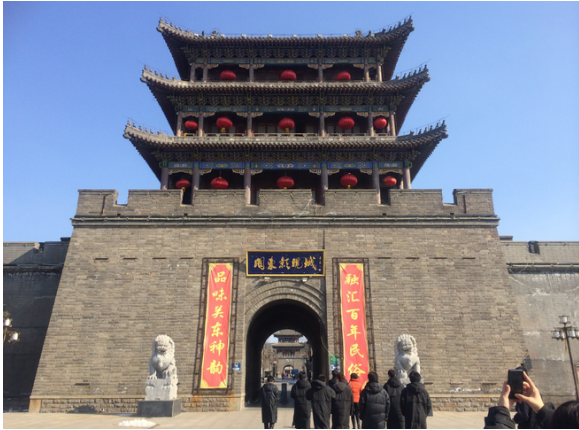


写真 5. 関東影視城



写真 6. 瀋陽工業大学主催歓迎会

スで、約1時間半かけて関東影視城（写真5）に到着した。関東影視城とは、日本の映画村のことである。目の前には湖が広がり、湖全体が凍っていた。これまでは見たことがないとても神秘的な光景であった。関東影視城ではドラマや映画の撮影で使用される建物を見学した。実際に建物内にも入り、日本とは違った赤を基調とした華美な色使いや造りに歴史と文化を感じることができた。

また観光時には偶然、日中戦争についてのドラマ撮影が行なわれていた。初めて見る撮影現場で、演技や演出の迫力を肌で感じることもできた。そして中国の俳優さんと日本についての話、撮影現場やドラマの話で盛り上がることもできた。ふだん間近でドラマ撮影の現場や、俳優さんたちと会話できる機会はないので、本当に貴重な経験になった。

17時30分に市内観光からホテルに帰り、18時からSUT主催の歓迎会（写真6）を開いていただいた。李学長、姜所長、李先生をはじめとしたSUT関係者の方々とKUT学生とで食事をした。SUT学生は英語が流暢で、積極的に話しかけてくれた。中国で流行っているテレビ番組を紹介してくれた。また、日本のアイドルや映画についての話もした。

歓迎会の終わりに、KUTの女子はKiroroの「未来へ」を唄った。男子は徳島県出身が多いので阿波踊りを披露した。KUT女子が唄った「未来へ」は中国でもよく知られている曲で、大変喜ばれた。またSUTの学生からは「手紙」を日本語で唄っていただいた。少ない時間ではあったが交流を深めることができ、大変充実した時間となった。

#### <研修を終えて>

卓球で最も印象深かったことは、黒龍江省プロチームとの練習だった。プロ選手との違いを見つけようと積極的に練習に挑んだ。相手チー



写真 7. SUT 学生と一緒に多球練習

ムの選手は技術や身体能力の面でとても優れていたが、精神力ではKUT学生が上回っていたように思えた。レベルの差は大きいですが、中国で学んだ練習方法やトレーニングを持続し、持ち前の精神力を活かすことができれば、KUT学生はさらに上を目指せると感じた。

学生同士の交流では、中国の学生は積極的かつ意欲的だと思われた。とにかく「恥ずかしがる」ということがない。また、中国の学生は日本のアニメ、俳優、映画等のことをよく勉強していると思った。それに対し、私は中国のことをよく知らないなので、これを機に中国の歴史や文化を勉強していきたいと思った。そして、互いの良い文化を取り入れていけば、国単位での成長や良い友好関係が望めるのではないかと感じられた。非常に実り多い研修であった。

### 3 / 3 卓球練習・日本語授業見学

マネジメント学部3年 1150474 溝渕 真由

遠征3日目の午前中は(SUT)の学生とともに練習をした。午後は日本語の授業見学を行った。ホテルを朝の8時半に出発し、バスで20分ほど走って大学へ到着した。9時からSUTの監督さんの指示に従い、ウォーミングアップから始めた。卓球台の周りをランニングしたのだが、SUTの学生はとても速く、KUT学生は少しずつ遅れていった。ウォーミングアップが終わり、練習が始まった。練習内容は、一球練習の者と多球練習(写真7)の者に分かれた。SUT学生は男女関係なく、ボールにとっても威力があり、回転量も多かった。SUTの多球練習はKUTと比べて、一籠(プラスチックの容器)のボールの数が多く、ボールを出すスピードがとても速い。ひとつの容器に200球のボールが入っていることを後で知った。KUT学生は出されたボールを追いかけるのが精一杯だった。一籠が終了したとき、脈拍数を図ってもらったがとても早かった。SUT学生は、何本打っても身体がぶれることがなく平気な顔をして練習をこなしていた。KUT学生の練習やトレーニングはまだ甘く、もっと自分たちの限界に挑戦し、それを越えなければならないと実感した。

日本語の授業見学は、体育館から徒歩で10分程歩いた校舎で行われていた。教室に着くと、日本語を学ぶSUT学生がたくさん着席していた。多分40人くらいである。教室に入った瞬間、指導教官が日本人かと思われるほど日本語が上手く、私たちは驚いた。授業を20分ほど見学したあと、KUT学生が1人ずつ前に出て自己紹介をした。名前と好きなアーティストや食べ物などを紹介したとき、とても反応が良く、SUT学生は日本の物事にとっても興味を持っていることを知った。

その後グループに分かれて日本語での会話(写真8)が始まった。どのグループも話が弾み、盛り上がっていたが、楽しい時間はあっという間に過ぎ、別れがとても名残惜しかった。日本のことについてたくさんの質問をされ、とても関心を持ってもらっていることがわかり、嬉しい気持ちがあった。

#### <研修を終えて>

今回2度目の研修に参加させていただいて、前回よりもさらにたくさんのことを学ぶことができた。瀋陽でも黒龍江でも前回は試合が多かったが、今回は練習する時間が多く、中国の学生の練習内容やレーシングを実際に肌で感じる事ができた。サービス、レシーブ等、見習うべきことがたくさんあり、多くのことを得た。私



写真8.日本語授業でグループ別に会話

は、SUTの監督さんに多球練習をしていただき、その厳しさも体験した。1つ1つの動作の間に休む時間は全くなく、すぐ息が上がるのを感じた。今回の遠征に参加できなかったメンバーにもこの練習方法を紹介してチーム全体の技術向上を目指したいと思った。

また、日本語授業見学ではSUT学生がとても積極的に話しかけてくれたので親しみやすく、すぐ仲良くなれた。自身の語学力がまだまだ足りないと感じたので、勉学においても今まで以上に積極的に取り組みたいと思った。

### 3 / 3 両大学卓球チーム懇談会

システム工学群4年1150036 兼子 瞭介

研修3日目の夜、SUTでの練習を終えた私たちは大学のバスに乗り夕食会場へと向かった。当初の予定ではSUT学生も参加をしてくださる予定だったが予定が変更され、不参加となり残念であった。しかし、李学長先生やSUTのバスの運転手さんが参加してくださり、いろいろなお話を聞くことができた。学長先生、運転手さんは共にとても気さくな方で、中国語を話すことができない私たちに対して簡単な日本語で話しかけてくださった。ご多忙な学長先生が私たちのために練習場へもたびたび足を運んでくださったことや、試合観戦もしてくださったことに感謝の気持ちでいっぱいである。

この日の夕食会場は、大きなスーパーマーケットの三階にあり(写真9)、中国では、かなり高級なレストランであった。メニューの中で特にKUT学生に好評だったものはエビの天ぷらや野菜いため、紅いもタルトであった。中国の料理はわたしたちにとっては辛いと感じるものも多く、中国の食文化



写真9. レストランでの食事中の様子

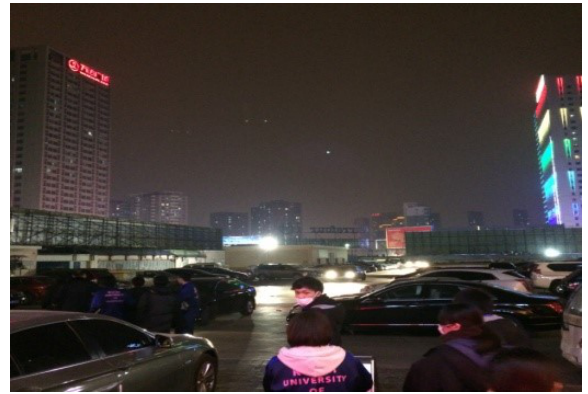


写真10. レストランからの夜景

を知ることができた良い機会となった。今回の海外研修は自分にとって初めての研修であり、今後の学生生活にとっても、非常に役立つ有意義な研修となった。

#### <研修を終えて>

黒龍江でのプロチームとの練習では、打球した瞬間に「こんなボールは受けたことがない。どうすれば返球することができるのだろうか」という感想を抱いた。中国選手のボールはスピード・回転量・コース等、どれをとっても私が今までに体感したことがないレベルである。

中でも特に印象に残ったのがサーブのレベルの高さで、レシーブする私の目では、下回転も横回転も同じボールのように見え、的確なレシーブをすることが非常に困難だった。全く違う回転のサーブが同じようなモーションから繰り出され、どのボールも同じように見え、頭が混乱した。失敗するとさらに変化が読めなくなり、レシーブをするのが怖くなってしまった。改めて自分のサーブ・レシーブの技術の低さ、卓球に対しての意識の低さを痛感させられる結果となった。

プロの選手にサービスの出し方のコツを質問し、カメラの動画にも取り込ませていただいた。この大きな収穫を今後は自分の武器とするよう、今以上に高い目標を目指してがんばろうと決心した。

### 3 / 4 公式戦

マネジメント学部 3年 1150433 武岡 紀幸

研修4日目はSUTとの交流試合が行われた。朝9時開始。李栄徳学長や大学関係者の方々が見守る中、男女混合の団体戦が始まった。この試合方式は一昨年と同様の形式である。2011年の交流試合では3-4で敗れていたため、今回は何としても勝利

したいという皆の思いがあった。一番からどの試合も接戦となり、ワンプレーごとに互いのベンチから声援が送られた。観客からもたくさんの拍手がおくれ公式戦は盛り上がった。

2時間余りに及んだ団体戦は昨年同様惜しくも3-4で敗れる結果となった。意気込んで臨んだだけにとっても悔しかった。しかし、前はSUTの選手に少し余裕があったように思えたが、今回はみな全力で試合に臨んでいたのが分かった。手前味噌ではあるが、われわれは2年間で少し実力をつけたことが証明されたと思う。

試合終了後、李学長から交流の記念品を贈呈された。学生たちは両大学とも卓球を通じた交流に感動していた。その後、両チームの学生は写真撮影を行い、さらに一段と交流を深めた。昼食後14時から個人戦を開始した。わたしたちは一人3試合を目標に、この2日間SUTで練習した技術や作戦を試合で実行した。この結果、相手の多彩な技術や戦術を吸収すると共に多くの課題を発見することもできた。

わたしたちは、これらの試合を通してSUT学生の技術や戦術を数多く学ぶことができた。またそれだけではなく、言葉が上手く通じない中でも卓球という一つのスポーツを通して大きな交流の輪を広げることができ感動した(写真11)。これらの経験を日本に帰って必ず部員たちに伝達したいと決心した。

#### <研修を終えて>

今回の中国卓球交流を通して最も印象に残ったのは、黒龍江省での練習だった。私は、帰国後数週間も経つのに現地での練習のあの打球感覚を忘れることができない。自分のラケットにボールが当たったときの彼らのボールの威力、スイングの速さ、正確で動きの早いフットワーク



写真 11. 交流試合終了後、全員で写真

には驚愕させられた。参考にすべき点ばかりで、基本技術の重要性を改めて実感した。

また、トレーニングでは省チームの中学生の身体能力の高さに驚かされた。自身の中学生時代とは異次元の現実があり、まだまだ努力する必要性も感じた。この卓球交流で学んだことや感じたことをこれからの練習に生かし、卓球部全体で共有したいと思った。

最後に、今回の遠征にご尽力を注いでくださった学長はじめ、大学関係者の皆様には感謝の気持ちでいっぱいである。ありがとうございました。

### 3 / 4 お別れの会

マネジメント学部 3年 1150493 和田 直樹

研修 4 日目の夜は KUT 主催のお別れ会が開かれた。会場は、瀋陽の三隆春天ホテルである。KUT 学生が早めに会場に向かい SUT 学生を出迎えた。午後 7 時にお別れ会が始まった。始めに KUT 国際交流部山崎さんをご挨拶をした。次に、KUT 卓球部顧問の浜田先生が感謝の言葉を述べた。最後に、SUT 李学長が挨拶をされ、乾杯とともに食事会が始まった。

食事会では両大学の出し物を披露した。KUT 女子卓球部が Kiroro の「未来へ」を日本語で歌い、SUT 卓球部はアンジェラ・アキの「手紙」を中国語で歌った (写真 12)。KUT 男子卓球部は、阿波踊りを披露した。SUT 男子卓球部も一緒に踊り、その場を盛り上げた (写真 13)。その後、両大学の学生同士で写真撮影をした。その後、両大学の学生が事前に準備をしていたプレゼントの交換をした。最後に、本学王先生が挨拶と感謝の言葉を述べ、SUT 李学長の



写真 12. お別れ会で「手紙」を歌う SUT 女子卓球部



写真 13. 阿波踊りを踊る KUT 男子卓球部と SUT 男子卓球部

終わりの言葉でお別れ会が終了した。

<研修を終えて>

この 11 日間の中国遠征を通して思ったことは、2 年前の中国遠征と比べ、積極的にコミュニケーションをとることができたことだ。卓球練習では、黒龍江省のプロチームの選手と練習をすることができ、貴重な経験を積むことができた。今後、このような機会はもうないかもしれないが、社会人になり、再びこのようなチャンスが訪れたなら、積極的に手を上げ、もう一度行ってみたいと思う。このような中国での研修のチャンスを二度も作っていただき、感謝でいっぱいである。

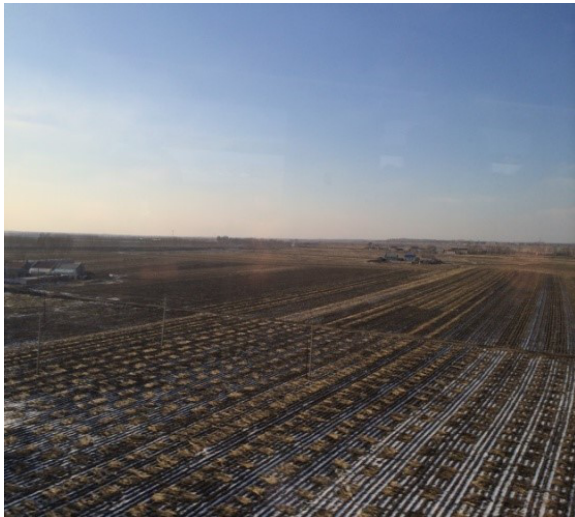


写真 14. 新幹線からの田園風景



写真 15. 歓迎パーティーでの料理

### 3 / 5 移動と歓迎パーティー

マネジメント学部 2年 1160482 宮本 卓也

3月5日、研修5日目に瀋陽からハルピンに向け新幹線で移動した。瀋陽駅を13時23分に出発。中国の新幹線は日本の新幹線と違って座席が6人がけであり、3人ずつが向かい合っていた。真ん中にテーブルが配置され、歓談できるようになっていた。瀋陽駅は想像以上の乗客でごった返しており、中国の豊かさが感じられた。小さい子供連れやお年寄りの姿も結構多く、みやげ物店も繁盛していた。

また、ハルビンまでの移動中、外の景色に日本との違いを感じ、驚かされた。畑が壮大に広がり、地平線を遠くに見ることができた(写真14)。日本では北海道以外では見ることはできないのではないだろうか。面積の違いを感じるとともに、このような広大な土地で生活できることに羨ましさを感じた。車窓からは高層ビルの景色はほとんど見えず一面の田畑の中を列車は走り続けた。そして、16時38分にハルビンに到着。ハルビン駅では黒龍江大学の日本語学科の生徒さん2人が出迎えてくれた。そしてハルビン駅から40分ほどで黒龍江大学に到着した。その後、留学生専用の寮で一休みし、寮からすぐ近くのレストランで開かれた歓迎パーティーに出席した。歓迎パーティーには黒龍江大学の曲副学長が参加して下さった。レストランでの食事はとても豪華であり、日本では食べたことのない料理ばかりでとてもおいしかった。中国ではどこのレストランでもテーブルの真ん中に回るテーブルがあり、食文化の違いを感じた(写真15)。

#### <研修を終えて>

今回の中国遠征に参加でき、多くのことを肌で感じる事ができた。自分は前年のヨーロッパ遠征に続き、2回目の海外遠征で、少し余裕があるつもりだったが、実際には、日本を出ると戸惑うことばかりであった。中国語はできないが、卓球を通じてSUT、黒龍江大学の皆さんと交流ができ有意義な研修になった。今回の中国遠征を計画してくださった、学長、国際交流部のみなさま、ありがとうございました。

### 3 / 6 黒龍江大学施設見学

マネジメント学部 1年 1160446 谷本 優太

黒龍江大学は瀋陽工業大学に比べて建物の形や色が独特で、西洋の建物に近かった。大学校内はとても寒く、氷が道の脇にかき集められて山のようになっていた。歩くスペースも少なく、滑りそうで緊張して歩かないととても危険であった。

日本語の授業見学をした建物は、黒龍江大学の中で1番最初に建設された学内では一番古い建物だった。教室がたくさんあり、一つの教室の大きさは工科大の教室とほぼ同様であった。

授業見学が終わると大学内の博物館に案内された。館内には黒龍江大学の校歌(写真16)や、大学設立当時の教職員について紹介されたものが多く(写真17)、黒龍江大学の歴史、授業改革、学校設立時の様子などを詳しく知ることができた。博物館を出ると「留学生商店」という名前の売店があり、中にはお菓子や飲み物がたくさん売られていた。



写真 16. 黒龍江大学の校歌



写真 17. 大学設立時の教職員たちを紹介する博物館案内人

#### <研修を終えて>

黒龍江大学は中国北部にあるため、想像以上に寒さが厳しく、大学内の道路も地面が凍っていて危険であった。また、木造の校舎も多く、歴史を感じる場面も多々あった。美術館は広大で、黒龍江大学の歴史、文化に触れることができた。いろいろなサポートをしてくれたボランティアの方々にも感謝したいと思う。

### 3 / 7 午前中、黒龍江プロチームと練習

マネジメント学部 2年 1160395 岡田 夏季

遠征 7 日目は黒龍江大学、黒龍江省プロ選手と練習を行った。KUT 学生が到着したときには、すでに選手たちは練習を開始しており、体育館内の雰囲気は緊張したものだった。KUT 学生は軽くストレッチを行ってから中国選手たちと練習を開始し



写真 18. バランス感覚トレーニング

た。9 時 10 分から 10 分間乱打を行ったあと、1 コマ目の練習にはいった。この練習は、40 分間 (10 分×4) 各自の課題練習を行なうという内容であった。中国選手たちは基本がしっかりしており、どの選手もフォームや体の使い方がとても綺麗で印象的であった。10 分間の休憩では各自ストレッチをしたり音楽を聞いたり軽食を摂ったりと自由にリラックスして過ごした。2 コマ目の練習は 10 時 10 分から 40 分間 (20 分×2) お互いのサービスからの全対全の練習を行った。中国選手たちはサービスが非常に上手だった。女子でも男子並みの回転量があり、またサービスごとの変化の違いも大きく私たちはみなレシーブに苦戦していた。

練習の合間に中国選手からサービスやレシーブ等の技術のアドバイスを受けている学生もいた。またラリーになってからも中国選手たちの威力やスピード、コースなどが厳しく、ふだんとは違った球を受けることができ良い刺激となった。10 時 50 分からは 5 分間軽くランニングをした後、11 時 20 分まで走りながら行なう様々なトレーニングを習った。横向きや後ろ向きで走ったり、反復や腿上げをしながら走ったりダッシュやスキップをしたりなど数種類のトレーニングがあり、私たちは中国選手をお手本にして同じメニューに取り組んだ。今までは、経験したことのないトレーニングで新鮮だった。このトレーニングはこれからの日本での練習にも取り入れていくことになった。今まで鍛えることのできていない部分を鍛えられるのではないだろうか。トレーニングのあとにはバランス感覚を養うトレーニングを数種類行い (写真 18)、最後に各自でストレッチを行って、午前中の練習を終えた。



写真 19. プロの選手に球出しをする



写真 20. 留学生の中国語授業の様子

<研修を終えて>

今回の遠征を通して一番感じたことは、国境を越えた人たちとの交流である。出発前は、空気汚染や反日感情など様々なことに不安を感じ、ニュースで中国のことを見るにつけ、マイナスの印象を持つことが多々あった。しかし、SUT学生や黒龍江大学の選手たちと触れ合うなかで、それまで抱いていた不安や偏見はなくなった。歴史的に見ても現在においても国や政治間では日中は複雑な関係にある。しかし、実際には人と人とのつながりや優しさなどには何の違もないのだと実感することができた。言葉は通じなくても友達になれる。これは中国に行き、その地の人たちと触れ合えたからこそ気づけたことだと思う。友好の素晴らしさを体験できたすばらしい遠征であった。

### 3/7 プロチームとの練習（午後の部）

マネジメント学部2年 1160466 福島 舞子

遠征7日目の午後2時40分にロビーに集合し、バスで黒龍江省体育館へと向かった。この日は黒龍江省に来て最初の終日練習の日であった。3時過ぎに準備が整い、まず卓球場内を走るウォーミングアップを行った。その後体操をして黒龍江省の選手とKUT学生が各自台についた。1コマ目は、10分×4回の一球練習が行われた。午前中と同じ形式であるが、メニューは決められておらず、選手が各自でメニューを考えて課題練習をした。40分間の練習が終わると、休憩なしですぐに多球練習に切り替わった。練習相手も変わらず2人一組で、一籠（プラスチックの容器）ずつ交替でボールを出し合っただけの練習であった（写真19）。多球練習もメニューは自分たちで決めることになっていた。黒龍江省の

選手は、一点だけにボールがくる練習ではなく、全面にボールを送球してもらい、動きを混ぜた厳しいメニューをこなす選手が多かった。

KUT学生の中には黒龍江省の選手に、技術面でアドバイスをもらっている学生もいて、交流しながら良い雰囲気での練習することができた。またボール拾いの時、日本のように捕球網などは一切使わなかった。ボール拾いを手伝うと黒龍江省の選手に止められた。ボール拾いも訓練であるため、手伝ってはならないとのことだった。膝を曲げ、ボールを手で一球一球拾うことが足腰の訓練だと言う。これは瀋陽のチームと同じ考えである。ボール拾いすらも訓練のうちと考える、強くなることへの貪欲さに中国の強さの秘密を垣間見た。

多球練習の後は15分ほどサーブ練習をした。その後ストレッチをして5時半に午後の練習が終了した。黒龍江省に来て初めての1日練習でKUT学生は疲れている様子だったが、その中でも質の高い1日練習をしたという充実感と達成感が溢れていた。

<研修を終えて>

この中国遠征を通して、本当にたくさんの貴重な経験をする事ができた。卓球のことに限らず、中国の文化に触れたことや現地の人との交流を通して、日本では学べないことを学ぶことができ、自分に足りないものや今後必要なことを課題として発見することができた。特に印象的だったことは黒龍江省のプロの選手たちと練習できたことである。技術面ではもちろん、卓球に対する姿勢の面でも大いに刺激を受けた。多くの方が尽力してくださり、このような貴重な経験をさせていただいたことに感謝し、この遠征で学んだことを生かして今後さらなる成果





写真 21. 日本語授業見学（交流時の様子）



写真 22. 黒龍江省プロ練習場（男子）

をあげるよう、より一層努力していきたいと感じた。

### 3 / 7 黒龍江大学授業見学

マネジメント学部 3年 1160387 泉 由里奈

遠征 7 日目は午後から黒龍江大学の授業見学を行った。最初に日本語の授業の見学を行い（写真 20）、現地の大学生と交流を図った。受講していた生徒の数は 15 人程度で、講師の方は三浦先生という日本人の方だった。日本人との交流が初めての学生が多く、大変快く迎え入れてくれた。瀋陽工業大学のときと同様に、黒龍江大学の学生と少人数でグループを作り、30 分ほど交流を行った（写真 21）。中国の学生に囲まれ、日本語があまり通じない中でどのようにコミュニケーションを図るのか、最初は KUT 学生も固い様子だった。しかし、現地の学生は日本に興味や関心を強く持っている学生が多く、積極的な学生が多かった。そのため、日本のアニメやドラマ、そして食べ物のことなどで会話がとても盛り上がった。10 分ほど経過したころには、どの学生にも笑顔が見られ、たいへん生き生きとして楽しい時間を過ごせたように感じた。見学後には「英語の重要さというものを実感した」という声や、「事前にもっと中国について学んでおきたかった」という声が KUT 学生の中から聞こえ、実際に現地の方と交流を図り、個々に感じたことや学んだことは、多くあったのではないだろうか。30 分という短い時間ではあったが、KUT 学生にとっても一生心に残る貴重な時間を過ごすことができた。

次に、場所を移動し留学生の受講する中国語授業を見学した。学生の人数は 10 人程度で、主にロシア人や韓国人の学生が多くいた。中国語のみでの

授業の中、教科書を見ながら熱心にノートを取っている姿や、進んで発音練習に取り組む姿、講師の方に疑問点を繰り返し質問し、積極的に授業に参加する姿を拝見し、KUT 学生もみな刺激を受けていた。また、講師の方が学生と積極的にコミュニケーションをとりたいへん良い授業が行われているなど感じた。この授業見学をするなかで、日本で行われている語学教育との違いを発見することができたことは非常に良い経験となった。

#### <研修を終えて>

日中関係が複雑な中で、中国に遠征すると決まり、最初は環境問題や政治的な問題を考えると、不安なことも多かったが、実際に現地へ足を運び中国の文化や人々と触れ合う中で学んだことは多くあり、改めて日本の素晴らしさを実感した。また反対に日本にはない中国の良さも発見した。現地の学生や国際交流部の方はとても明るく親切な方が多かった。現地の方と接する中で、中国の方々の温かさや優しさに触れ、思いやりという心は世界共通に存在し、改めてその素晴らしさを感じることもできた。今回の遠征を通して、中国の良さを現地で学び、中国に対するイメージが大きく変化し、グローバルな視野を持つことの重要性を感じた。また、多くのことを吸収でき、とても有意義な遠征になった。

### 3 / 8 交流大会開催

環境理工学群 3年 1160387 森 大樹

3 月 8 日は、交流戦と市内観光の予定であった。まず、プロ選手との試合について述べる。試合はシングルスで、1 人 4 試合を黒龍江省プロ体育館で行なった（写真 22）。練習ではかなりの実力差を感じ

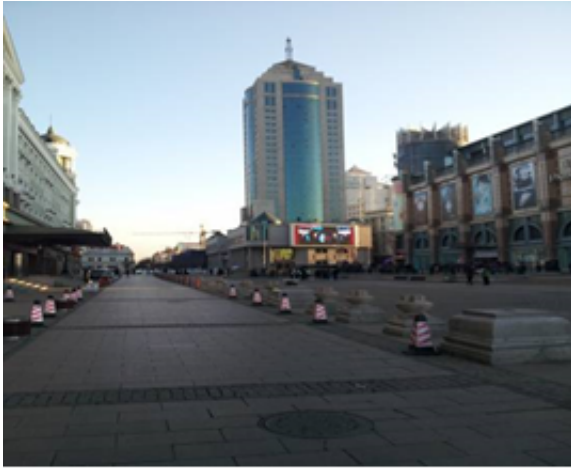


写真 23. ハルビン市内の景観

ていたので、「簡単に負けてしまうのでは」というのが正直な気持ちだった。しかし、やってみるとかなりの接戦ができた。しかし、最終的には勝負どころの1点が取れず1セットも取ることができずに終わってしまった。試合を終えての反省の結果、「私たちには彼らのような勝負強さが足りないこと」に気づかされた。しかし、負けることによっていろいろなことが見え、「自分たちには何が足りないのか」を深く考えることができた。この数日で勝負の厳しさ等、多くのことを学んだと思う。

ハルビン市での観光は5つのグループに分かれ、一時間程度の観光をするという計画だった。町並みはとても広く綺麗で、事前に調べていた中央大街なども見ることができた。また、ロシアとの国境付近ということもあって建築物やお土産など、ロシアに近い感じだった。興味深かったことは、道路の両わきにかなり深く埋め込まれている石のことで(写真23)。この石が深く埋め込まれている理由は、「どれだけ時が流れても、いつまでも石が綺麗なままで無くならないように深く埋める」という先人の知恵だとのことであった。市内観光では中国というよりロシア観光をしたような気分だった。

#### <研修を終えて>

私は黒龍江省では1勝もすることができなかった。しかし、前述したように勝負どころでの重要性等、多くのことを学ぶことができた。ここでの練習は厳しく、トレーニングもきつかった反面得ることも多かったと思う。

これほど厳しい練習を毎日行なっているのでプロ選手は強いと言うことにも納得が得られた。私も自分にもっと厳しくなろうと決心した。市



写真 24. 黒龍江大学体育館

内観光では、同じような建物が綺麗に並んでおり感動を覚えた。今後この遠征の成果を出したいと思う。

### 3 / 8 黒龍江大学、ハルビン工業大学、ハルビン理工大学と団体戦

マネジメント学部 1年 170430 澤本あずみ

遠征8日目は黒龍江大学体育館において(写真24)、黒龍江大学、ハルビン工業大学、ハルビン理工大学、高知工科大学の4校でリーグ戦を行った。試合会場につくと各大学の選手たちがすでに練習をしており、緊張感がひしひしと伝わってきた。どの大学のメンバーも全員レベルが高く、特に黒龍江大学は優勝候補と言われていた。KUTは2位あるいは3位だろうと他大学からは予想されていた。

しかし、一致団結し、絶対に諦めない姿勢で最後までプレーした結果、高知工科大学女子は優勝することができた。男子は惜しくも4位だったがすべて接戦で、今後につながる試合内容だった。試合終了後、黒龍江大学関係者の方と写真撮影をした(写真25)。

中国の選手はどの試合でも気を抜くことなく常に全力でプレーしていた。1球1球の気迫や重みは、KUTとは全く違っており良い刺激を受けた。また、全力でプレーすることで言葉が通じなくても卓球というスポーツで国際交流をすることができた。

#### <研修を終えて>

今回の団体戦のリーグ戦では、たくさんのことを学ぶことができた。まず1つ目は技術面である。中国選手のボールはとても回転がかかっており、サーブの回転量もKUTとはかなりの差があった。ピッチもはやく、自分のプレーに取り入れたいと感じた。



写真 25. 大会終了後、関係者の方たちと記念撮影

2つ目は心理面である。中国選手は、最後まで絶対にあきらめない気持ちが非常に強かった。私たちもみなあきらめないで戦ったので良い大会となった。自分もこれからはあきらめない気持ちを大切にしていきたいと決心した。

この遠征にご尽力くださった学長先生はじめ、引率してくださった先生方、瀋陽の方々、黒龍江の方々に、深く感謝したい。今の気持ちを忘れず今後も日々の学業と部活動に取り組んでいきたい。

### 3 / 9 交流試合終了後の懇談会

マネジメント学部 2年 1170456 成田 湧介

研修9日目の夜は、交流試合が終了してから黒龍江大学の学生や関係者とともにハルビン市内の「外婆居鴨桜」という料理店で懇親会を行った。

午後6時に試合が終了し、バスに乗ってハルビン市内まで移動した。「外婆居鴨桜」はハルビン市内のデパートの中にあり、立派な店構えであった。料理は麻婆豆腐やチャーハン、北京ダックなどもあり、非常に美味しく、感動した。また、この研修9日目である3月9日は3年生の谷本優太さんが誕生日ということで、サプライズでケーキが用意されており感激した。また、参加者全員で歌を歌い、ケーキを頂き、谷本先輩の感激はひとしおであった(写真26)。食事中には筆談や、英語を使ったり、通訳の人に助けってもらったりしコミュニケーションをとり、交流を深めることができた。懇親会の終わりには、日本で用意して行ったプレゼント(日本にしかないお箸や湯飲みなど)を学生たちと交換した(写真27)。交換後、その使い方を伝達する中でまた会話が弾み、交流を通して、日本文化の一端を理解してもらうことができた。意義ある懇親会であった。



写真 26. 谷本先輩誕生日祝い

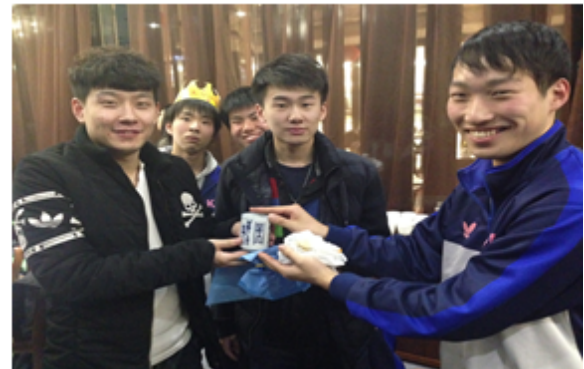


写真 27. プレゼント交換

<研修を終えて>

今回中国遠征に参加させてもらい、初めての海外で不安もあったが、一生忘れることのない遠征になったと感じている。中国で10日間生活して、日本とは違う文化を体験することで視野が広がったと思う。中国大学生の選手や省チームの選手と練習・試合をし、自分の力の無さを実感することができた。

中国選手の中でも強い選手は、ストイックな選手が多く、練習の休憩時間にも筋トレをするなど、意識レベルが高いと感じた。今回の遠征で、良い刺激をもらうことができ、これからよりいっそう努力していかなければならないと感じた。また、中国の選手と歓迎会や懇親会で交流するたびに、自分の英語力の無さも実感した。自身の大学生活の目標でもある、「文武両道」をめざし、これからも卓球と勉強の両立に励んでいきたい。



写真 28. 黒龍江でお世話になった通訳の張さん  
(下段中央)

### 3 / 10 卓球練習

マネジメント学部 1 年 1170463 濱崎 羅奈

最終日の練習内容はこれまで通りであった。しかし、中国遠征全日程の最後の練習ということもあり、雰囲気は異常に緊張していた。「中国の卓球をこんなにも傍で感じることができる日はこの日しかない。ここで吸収できるのは、この瞬間しかない」という自覚が KUT のそれぞれにあった。集中していることがまざまざと伝わってきた。黒龍江の選手たちと卓球について話し合う姿、一生懸命質問する姿がそこにあった。思い返せば 1 日 1 日辛いこともあったが、終わりが近づくほどあつという間に日々が過ぎた。

練習が終了しお世話になった黒龍江のかたがたとのお別れの時は本当に感極まってしまった。集合写真を撮り(写真 28)、お互いにハグや握手をかわす選手たちからは、初日には見られなかった笑顔が見られた。言葉がうまく伝わらなくても国境を越えて仲良くなれることが形になっていた(写真 29)。

#### < 研修を終えて >

私にとって初めての中国遠征は実に多くの学びがあった。何より高校 3 年間で一番学んできた英語を再び生かすことができ本当に嬉しく思った。同時に英語が好きな自分も再認識でき、また英語の勉強に励みたいという向上心へと繋がった。また、母国語が違って完全には考えが伝わらなくても、お互いに心から笑えるほど仲良くなれるということを改めて実感することができた。同時に日本ではあまり見られない練習場の光景、積極的な態度、意識の高さを目の当



写真 29. お別れ時にプロの選手と

たりにし、見習わなければならない面をたくさん発見することができた。この遠征に参加できてよかったと感じている。

この経験は私にとって一生の思い出となり、今後、学んだことを行動で示し、様々なことに挑戦していきたい。

遠征での 1 日 1 日は辛かったり楽しかったり様々であったが、これらを自身の卓球や勉学に生かし、今後の大学生活を送っていきたい。

# Reports on Student Study Tours to China in 2013 and Invitation of Heilongjiang University in 2014

**Miho Hamada\***

(Received: May 15th, 2015)

CORE Studies, Kochi University of Technology  
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782–8502, JAPAN

\* E-mail: hamada.miho@kochi-tech.ac.jp

**Abstract:** We had a chance to practice table tennis at Shenyang University of Technology and Heilongjiang University that have deep relationships with Kochi University of Technology for the first time in 2011. In March 2013, we could visit them for the second time. We were extremely grateful that they could accommodate us for 11 days in total, which is 5 days longer than our first visit. What is special about this time visit is that we experienced the intensive and enthusiastic table tennis practice with the excellent players of the two universities and Heilongjiang professional table tennis squad. Some promising junior players were also playing in the professional team, and they greatly inspired and motivated our teams. All the members welcomed us heartily and we were also touched by their warm hospitality. As a part of series of table tennis exchange activities, we invited 2 head-coaches and 4 players from Heilongjiang University for the one-week training camp with us last September. All the members of our club were given a valuable chance to play table tennis with them. I'm convinced that their visit to KUT encouraged the students who could not join the previous trainings in China to devote more energy to table tennis in the future.